

アーサー・ミラーの『壊れたガラス』

——砕かれたアイデンティティ——

川 野 美 智 子

(1)

1994年4月6日のザ・ニューヨーカー紙は「街の噂」のコラムの中で、ミラーの今回の作品について語っている。これによると、ミラーは『壊れたガラス』のヒロインを演じたエイミー・アーヴィングのことを、「9000万ドルを手に入れると顔には皺一つ無くなる」と言った。エイミーは1989年にスティーヴン・スピルバーグと離婚し、この「帝王」の多額の慰謝料を受け取ったのである。そしてミラーは、劇中心因性麻痺を病むヒロインを演ずるにはエイミー・アーヴィングは余りに若々しく美しく、髪や入念なメイクアップでこの悩める中年女性を作り出さねばならぬことを揶揄したのであった。こんなジョークを劇作家に言わせるほどの余裕は、ニューヘイヴンのロングウォーフ劇場で一挙に5週分を売り切ったチケットの売れ行きから来ており、その次の週には公演はブロードウェイに移ったほどの人気であった。前作『最後のヤンキー』のアメリカ国内での不人気にも関わらず、アーサー・ミラーは現存するアメリカの劇作家の中でも最も偉大とされ、この年だけでもイギリス、フランス、スウェーデン、ギリシャ、日本でその作品が上演されるほどだと言われた。しかし、劇作家は常に批評家のパンチングバッグである。同じ4月22日のザ・ニューヨーク・タイムズはこの作品を、整っておらず、曖昧さに満ちたアクションもない劇と評した⁽²⁾。が、酷評は無視に勝る。ミラーのこの作品への集中の強さはそのかなりの長さや主題の選択からも窺い知ることができるように思われる。

この劇の登場人物はユダヤ人の銀行支配人フィリップ・ジェルバーグとその妻のシルヴィア、彼らの家庭医であるハリー・ハイマンとその妻マーガレット、

シルヴィアの妹ハリエット、フィリップの上司スタントン・ケースの6人で、さほど多いとは言えない。時は1938年11月終わりの数日間であり、場所はブルックリンの医師ハイマンの診察室、ジェルバーグ家の居間と寝室、スタントン・ケースの事務所の三か所である。プロットもジェルバーグ夫妻の病をめぐるもので、こうした点からは一応三一致の法則を満たしているように思われる。しかし問題が見えてくるまで、これらの人物が三箇所ですれ代わり立ち替わり対話を交わし、短時日の経過ののち第二幕では急転直下問題の核心に迫る対話がつぎつぎに飛び出してくる。極めてリアルな日常の言葉の中にアイロニーをちりばめたアフォリズムも続出して、構成の複雑さとともに主題に収斂してゆくまでの経過に、ミラーの熟達した手腕のほどが現れているように思う。

整理のために筋の進行と場所と登場人物マップを図示して見たい。

幕・場	ハイマンの診療室	場	ジェルバーグ の家庭	場	ケースの事務所
I. i.	マーガレット ハイマン ジェルバーグ	ii.	シルヴィア ハリエット ジェルバーグ		
iii.	ハイマン ハリエット			iv.	スタントン・ケース ジェルバーグ
		v.	シルヴィア ハイマン		
II. i.	ジェルバーグ マーガレット ハイマン				
ii.	ハイマン ハリエット			iii.	スタントン・ケース ジェルバーグ
		iv.	シルヴィア ハイマン ジェルバーグ	v.	スタントン・ケース ジェルバーグ
		iv.	ジェルバーグ ハイマン シルヴィア マーガレット		

この一見ばらばらに見える人物配置と舞台転換のシフトの速さは、数年前に

ミラーが関心を持ち、試みて成功した映画の手法が用いられていると推測される。フラッシュバックのあからさまな使用こそないが、会話のテンポ速いリアリズムの中に、過ぎた時代の痛みが登場人物の体の痛みとなって呻きを上げる。啓示は緩慢だが、台詞交換の中に主題が確実に展開され、やがて会話は主題の解決を求めてのディスカッションへと急速に移り変わってゆく。

(2)

前の場(二幕一場)にすぐ続きほとんど同じ場と考えられる二幕二場と、自分の失策のために冷たい態度をとる上司とジェルバークがオフィスで対決する二幕五場を除き、全十一場の殆どの幕開きでは、孤独なチェロ弾きが単調なメロディを奏でる。彼に当たっていた照明が一旦消え、再び舞台が明るくなって劇の動きが始まるが、観客はこのチェロの調べを耳にするたびにしみじみと過ぎ去った「あの時代」への思いに浸る。

1938年、それは第二次世界大戦の前夜、大洋を隔てたアメリカでもヨーロッパの暗雲が色濃く窺える時代であった。アメリカの紀元元年とさえ言われたニューディール政策の始まった1933年は、ドイツではワイマル共和制の崩壊後ナチスが決定的に権力を獲得した年である。翌34年には社会主義的な第二革命を強行して反動派を打倒することを要求したE. J. レーム(1887-1934)を初めとする競争者を粛清して、ナチスの狂気はとめどがなかった。ゲルマン的要素の強化政策は1942年の強制収容所内における劣等民族への無慈悲な絶滅政策となつて顕現する。⁽³⁾ミラーのこの戯曲でシルヴィアの夢に度々出現して彼女を苦しめるユダヤ老人の虐げられた姿は、こうした背景によるものである。

一幕一場では、40歳台後半のフィリップ・ジェルバークがハイマン医師の診療室を訪れる。神経性の下肢麻痺に陥った妻シルヴィアについて相談するためである。初めは医師の妻マーガレットとの話から、彼らの周辺の些事が観客に示される。ジェルバーク夫妻は二人ともフィンランド出身であること、ハイマン医師は乗馬が、妻マーガレットは園芸が趣味であること・・・やがて帰宅したハイマン医師は50歳台後半、毅然とした科学的理想主義者であることが、外

観からもフィリップとの対話の内容からもみてとれる。医師は早くも、シルヴィアの下肢麻痺は心理的なものであること、そしてそれらが何らかの「恐怖」に原因すると推測する。この劇全体を貫通する主題の提起である。

主としてハイマン医師によるこの「恐怖」の追究と解明への努力がこの劇の主筋をなすのであるが、この場ではさりげなくドイツの現状が男たちの話題となる。

ハイマン：私はこのアドルフ・ヒットラーが騒ぎの元だと思いますよ。新聞で彼のことを読んででしょう？

ジェルバーグ：ええ、でも大して読んではいません。普通の場所で十時間や十一時間働くんです。

ハイマン：この一週間ベルリンではユダヤ人の店を叩き壊していました。

ジェルバーグ：ええ、昨日も新聞でそれを見ましたよ。

ハイマン：困ったもんです。老人に歯ブラシで舗道を擦らせるんです。⁽⁴⁾

そしてハイマンは、オーストリアに侵攻し次にチェコスロヴァキアを、そしてポーランドを狙うナチスを「ドイツを乗っ取った野蛮な狂信者たち」と罵る。ハイマンはハイデルベルクで博士号を取り、音楽を愛し魅惑的な声で合唱しながら通りを歌って歩く学生たちと、その歌に拍手を送った民衆の記憶を消すことができない。そして、その愛すべきドイツ人と、今新聞紙上で伝えられる非道なナチスとのギャップが信じられないのだ。このあたり、『ヴァイシーのできごと』のフォン・ベルクのドイツ人観を想起させられる。

ナチスによる老人迫害に胸を傷めるジェルバーグもハイマンも共にユダヤ人である。非ユダヤ人の妻を持つハイマンと違って、ジェルバーグの妻もまたユダヤ人である。ジェルバーグ自身、格式あるウォール街の銀行でワスプの中のただひとりのユダヤ人重役として働いている。彼の誇りは、陸軍でただひとりのユダヤ人将校となりそうな息子ジェロームで、息子はマッカーサーのスタッフとして将軍から友好的な言葉を掛けて貰えるというような手紙を、息子から受け取ることも彼の喜びである。

これらのことから、ユダヤ人がアメリカ社会で人並みの地位に登るにはいか

に努力と幸運を必要とするかが窺えると同時に、裏返せば彼らのインフェリオリティ・コンプレックスの激しさもまた知ることができよう。

(3)

一幕一場に出現する主題としてもうひとつ重要なものがある。それはシルヴィアの麻痺の原因として推測され得る性的な問題である。シルヴィア夫妻の性的不能、性的不満はハイマンの口からの質問の形でのみ出されるが、これが大きく取り上げられるのは第二幕に入ってからである。

この長大な一幕一場に続いて、一幕二場では全く同じ問題が当のシルヴィアとその妹ハリエットの対話を通じて開陳される。車椅子に座って新聞を読むシルヴィアの目には、眼前にないものが映っている——新聞に載った写真から、彼女はベルリンの街角で舗道を歯ブラシで掃除しているユダヤの老人に重ねて、自分の祖父の姿を見ているのである。やがて帰宅したフィリップとの夫婦の会話も、出世の見込みある息子から来た手紙についての話題も含めて、噛み合わない。なにものかに脅え、夫の励ましにも答えることのできない妻に、フィリップは怒りを爆発させる。

一幕三場は、同じシルヴィアの病変について妹ハリエットがハイマン医師に話す場面である。語られる内容は殆ど同じだが、視点が異なることにより、状況にはまた違った角度から光が当てられることになる。まるで芥川の『藪の中』だが、ヒロイン・シルヴィアの妹ハリエットの明かすジェルバーク夫妻の結婚生活の真実は恐ろしいものだった。それはひとつには家族を支えたフィリップ・ジェルバークの激しい性格と粗暴な行動であり、更に彼の暴力の原因は性的不能のコンプレックスだと、ハリエットは仄めかすのであった。彼女らの母と妻シルヴィアに暴力を振るったあとフィリップは部屋の片隅に静かに坐り、妻を崇拜の眼差しで見つめる。ハリエットはそんな彼の表情を「心も潰れる⁽⁵⁾」と表現している。

一幕四場は一転フィリップの上司スタントン・ケースの事務所である。絶好の日和にスタッテン島とロングアイランドの間の帆走にでかけるケースを引き

止めて、土地の買収計画調査の報告をするジェルバークは、この企画に否定的な結論を述べる。ブロードウェイ611番地の土地を買収しハーヴァード・クラブの別館として改修しようとするケースに、ジェルバークはその付近からのワナメーカー百貨店の移転または撤退を見込んで、企業のこの計画の阻止を進言する。この時点ではジェルバークの仕事上の読み違いはまだトラブルとしては現れないが、上司には妻の病気のこともひた隠しにして、出世階段から転落するまいと必死に努めるジェルバークの苦悩は大きい。

一幕五場では、初めて当事者である麻痺患者シルヴィアと医師ハイマンの対話がある。病院の診察室でなく、シルヴィアの寝室を訪れたハイマンは乗馬の楽しみを語り、ドイツの森のようなオーシャン・パークの楓の木のアーチの下を騎乗するのは詩のようだ、とリラックスして話す。そんな医師に心を開くシルヴィアは、促されてハイマンに対する恋心を打ち明け、また自分の心を捉える恐怖の実体を見据えようとする。彼女が認識するのはユダヤ人を迫害するナチへの恐怖と憎悪だが、ハイマンは、ナチスではなく夫フィリップに抱く恐怖と嫌悪を指摘し、ここにミラー劇のテーマであるホロコーストの悲惨と家族・夫婦の愛憎の問題が一つにつながる。幕切れ、ハイマンが退場したあとシルヴィアは利かない脚を手で動かして、性的な欲求を暗示しつつ闇の中に横たわる。

(4)

第一幕の五つの場で、局面と視点を変えることにより問題に様々な角度で光をあてることが試みられたが、第二幕の六つの場は第一幕の各場に着実にまた微妙に相関する。まず二幕一場は一幕一場に、二幕二場は一幕三場に、二幕三場と五場は一幕四場に場面と登場人物において対応する。内容は勿論一幕の後の微妙な、また時には決定的な進展を含んでいる。

まずハイマンの診療室での二幕一場では、ハイマンとジェルバークの対決とでもいいたい真相糾明の話し合いで、浮かび上がってくるのは夫婦間の性交渉をシルヴィアが全くなかったこととして意識していないということである。こ

れに続く短い二場では再びハリエットがハイマンに「姉は貴方を愛している」と明言する。次にスタントン・ケースの事務所での二つの場面では、すでにブロードウェイ 611番地に関するジェルバーグの見込み違いが明らかになり、会社に損害を与えたことを彼は負い目に思わなければならない立場にいる。三場ですでに仄めかされているジェルバーグの心臓の不調は、五場でケースの信用を全く失ったと悟る場面で破局に到る。最も重要なのは、車椅子のシルヴィアとハイマンが対決する四場と、六場の心臓発作に倒れて床に臥すジェルバーグと反対に麻痺を脱したシルヴィアをめぐる大団円である。

四場では、下肢麻痺はまだ癒えないながら、シルヴィアはエディ・カンターの歌をラジオで聞きながらリラックスした気分にいる。往診に訪れたハイマンに彼女は幼かった頃の記憶を語る。これには、今は建て詰まったブルックリンで野菜の苗を植えながら述懐するウィリー・ローマンの涙ぐましい追想と一脈相通じるものがある。

ハイマン：子供にとっては天国だった。

シルヴィア：知ってます。一番近い八百屋さんはチャーチ・アヴェニューを何マイルも行ったところだったわ。私達馬鈴薯を50ポンドの袋で買ったものよ。女の人たちはパンを焼きジェリーを作りトマトを庭で育てたのよ。

ハイマン：イタリア人が空き地にトマトとピーマンを植えたのを覚えている？

シルヴィア：ええ！あそこのおばあさんたちはサラダにする野菜を摘みに出てきたわ。

ハイマン：それからタンポポ酒だ。

シルヴィア：ブルックリンは本当に美しかったわね。あの頃人々は今よりもっと幸せだったと思うわ。母はポーチに立って私達が遠くの学校に行くのを見ることが出来たわ。きっと1マイルもあった開けた野原越しにね。そして私は三人の妹達の後を追いつけなくて済むように、あの子たちの周りに綱を結んだものだったわ。

こんな牧歌的な昔のブルックリンから、シルヴィアの夜毎見る夢は何と隔たっていることだろう。彼女の夢では全てが灰色で、大勢の群衆が一箇所に詰めてこまれていて、「彼ら」が彼女を襲い始める。そのドイツ人たちから漸く逃れたとき彼女を押し倒す男、それがフィリップだとシルヴィアは言う。

第一幕でフィリップがハイマンに打ち明けた話——夫が妻と交渉を持ったとき妻はそれを覚えていなかったという報告は、シルヴィアの告白で偽りと分かる。若い日、夫の不能を父に話し、父が夫に治療を勧めたため夫は怒り、それ以来没交渉がつづいたということ、夫の不能と妻の不満が深層において妻の恐怖を醸成し、その恐れの対象が夫からドイツ人へ、またその逆へと錯綜していることが四場から知られる。

シルヴィア：あいつらは窓を打ち壊し、子供たちを打っている！私はそのことを言ってるの。・・・私は自分の人生をどうしたのかしら、無知のために。他の人々の前であなたを辱めたくないために、全生涯通してよ。二三枚の小銭みたいに投げ捨てたわ。⁽⁶⁾

フィリップの側にも言い分はあった。有能なキャリア・レディであったシルヴィアが結婚後仕事に戻りたいと言ったときそれを禁じたのはフィリップだった。家庭にこもって誰一人訪ねる者もない生活を強いられたためにシルヴィアは夫を許さず、妻は夫の存在を疎ましく思う。妻がもう子供は欲しくないと言ったとき、夫の中の全ては干上がってしまった。夫は自分が変わるのを、また妻が変わるのを待ち続けた。しかし二人はそれが何の関係もない境地に達し、もはや何物もそれを変えることはできなくなった。

(5)

「壊れたガラス」とはベルリンの街路上に散ったユダヤ人商店の窓ガラスであった。海を隔てた彼らにはその映像はたとえ人間として心痛むものであるとしても、本質的には何の利害関係もないはずのものであった。しかし彼らの深層の血がそれに鋭く反応した。⁽⁷⁾「ユダヤ人はユダヤ人の顔だわ」シルヴィアが

夫に突き付けた、彼らの動かしようもない宿命である。

彼らはユダヤ人であることを誇りに思う反面、内心激しく憎み続けた。商店のガラスと共に、彼らの人間としての矜持は打ち砕かれた。自我と民族のアイデンティティは地にまみれた。愛を見失った夫婦にとってこのアイデンティティの喪失は致命的である。破局はすぐ間近に見えている。しかし医師を愛し始めた妻の心に癒しが訪れる。すっかり萎えた妻の脚に力が蘇り始める。

最後の第六場では、心臓発作を起こして倒れた後病院から無理やり帰宅したジェルバークをハイマンが診察している。ジェルバークの心をまず占めるのは、会社への裏切りとして不当にも非難を受けている仕事のこと、そして自分を恐れていると思われる妻のことである。第四場で、ハイマンを見るシルヴィアの目のなかに愛を見てとった夫は、ハイマンに妻との情事を問いただしさえするが、ハイマンはあくまで道徳的、紳士的で、ジェルバークに対する友情に満ちている。

ジェルバークは新婚のある一日を思い出す。

モーゼのようなユダヤ人で一杯の街路で、私はたいへん寛ぎ、幸せだった。⁽⁸⁾

陽の照った美しい日、丸一日休暇を取ってベッドを買いソーダとアイスクリームを飽食し、鍋とシーツ、毛布と枕カヴァーを買った。妻が通ると大道商人たちは皆振り返って彼女を見た……これもミラー作品のなかで時々遭遇する心に残る叙情的な回想の一シーンである。

ジェルバークが再びユダヤ人迫害に話題を移し、「彼らは私達を破滅させはしない。最後のユダヤ人が死ぬとき、世界の光は消えるのだ」とカリスマ的な信念を歌い上げるとき、ハイマンはもっとずっと冷静でシニカルである。⁽⁹⁾

私の診療所には様々な人間がやってくるが、その中の誰ひとりとしてなんらかの形で迫害を受けていないものはない。貧しい者は富める者に、富める者は貧しい者に、黒人は白人に、白人は黒人に、男は女に、女は男に、カトリックはプロテスタントに、プロテスタントはカトリックに、そ

(10)

して勿論彼らの全てはユダヤ人に。

そして全ヨーロッパの人々を虐げていると思われるヒトラーも、ハイマンによれば完全に虐げられた人間で、その解決は鏡以外にはない、というのである。⁽¹¹⁾ 倨傲であって同時に対極のコンプレックスを持つヒトラーも、鏡に顔を写して内省する必要があるというのか、あるいはヒトラーの他を虐げる生活信条を左右逆に鏡に写して、他動と受動の座標を逆転させようというのか。近付く戦争の暗雲に戦き、性と愛と差別に翻弄される1938年の登場人物たちの上に君臨する90年代の劇作家のアイロニックな余裕が見てとれるではないか。

回復の兆しが見えながら、ハイマン医師との関わりを繋ぎたいために無意識の底から病気の現状維持を望むシルヴィア。そんな妻を自分の元に返してくれとハイマンに哀願するフィリップ。ハイマンとの絶縁を望んで、フィリップはシルヴィアに立ち上がれと命ずるが、ハイマンに強く制止されて彼は床に崩折れる。フィリップの心臓マッサージと酸素マスクの必要から、ハイマンはシルヴィアの助けを求め、それを果たしたシルヴィアは、突然活力が自分の脚に蘇ったのを感じる。夫の命を救うためにシルヴィアは強くなった。世界は相変わらず恐怖に満ちている。しかし彼女はそれに負けない生き方を選ぼうとする。今シルヴィアとフィリップの立場は完全に逆転した。今は瀕死の病床にいるフィリップをシルヴィアとハイマン夫妻が見守っている。彼の生命を必死に助けようと、そして「彼らの解放の響きを求めるかのよう」に⁽¹²⁾。

この最後のトガキが表現するものは何か。四人の男女の求める解放とはこの際、やはりフィリップの回復によるシルヴィアとの愛の達成、そしてそれによるヒューマニスト・ハイマン夫妻の健全な社会生活への貢献に他ならない。シルヴィアの麻痺にこそ癒しは訪れたが、フィリップの生死は保証されていない。劇の終わりはどこまでもテンタティブでベンディングである。しかし少なくともこの劇の経過を辿って、問題は闇から明るみに出た。人の精神の暗部は解明され、無意識は意識に、不条理は理性に啓かれた。ベルリンの路上に砕け散ったユダヤ人の人権が回復されるには幾世紀をも要するかも知れない。が、たとえ対象が夫以外の男性であったにもせよ、シルヴィアの自我が愛に目覚

め、その意識による過去の掘り起こしが人間性の暗黒部の直視と治癒に発展してゆく可能性を、この結末は暗示していると思われる。

リアリズムに徹したこの劇は、後半ミラーが最も得意としたディスカッション・ドラマの線で精彩を放って行く。そしてミラー独自のモラルも太い背骨となって通っている。ナチスの跳梁という素材から56年経ったこの劇の、今なお斬新な主題の重みに喝采した世間から、「あなたは満足か、あるいは更に変化は成るのか」と問われ、50年の経験を経た劇作家は答えたという。

要は、船がともとへさき、両側と甲板を持っているかということだ。だから、船を水におろしなさい。そうすれば船はあとかたもなく沈むか、でなければ浮かぶかのどちらかなのだ。⁽¹³⁾

86歳を迎えたアーサー・ミラーの、自然体にしてよく人生の機微を捉えたその劇世界の更なる展開を祈りたい。

註

- (1) Cf. *The New Yorker*, April 6, 1994.
- (2) Cf. *The New York Times*, April 22, 1994.
- (3) Cf. 『世界の歴史 15』中央公論社, pp. 352~59 他
- (4) Arthur Miller: *Broken Glass*, Penguin Books, 1994, p. 11.
- (5) Ibid., pp. 107-108.
- (6) Ibid., pp. 127-129.
- (7) Ibid., p. 130.
- (8) Ibid., p. 142.
- (9) Ibid., p. 152.
- (10) Ibid.
- (11) Ibid., p. 153.
- (12) Ibid., p. 160.
- (13) *The New York Times*, April 22, 1994.